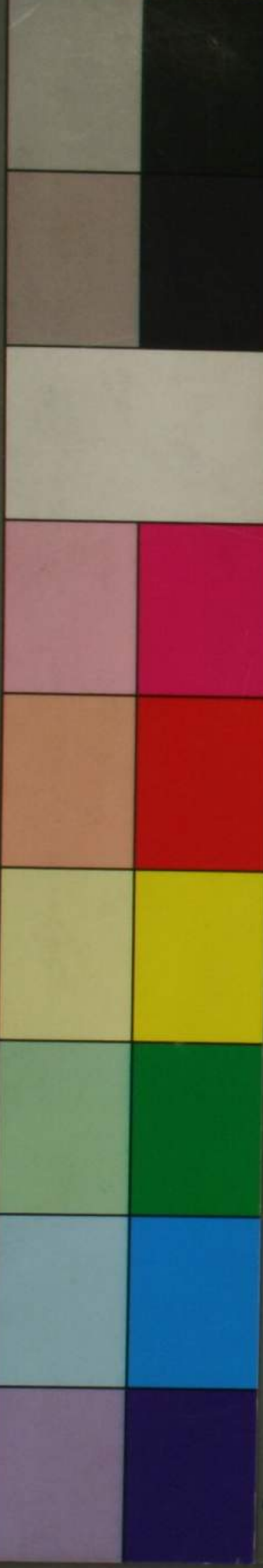


KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19



筑紫紀行

一

品名
344
1



菱屋翁著

筑紫紀行 十冊

尾張 書肆 東壁堂

筑紫紀行序

予弱齡おや伯父の家おふにお居かりて

天倫てんりん乃親おや之あり人子ひとこ父子ちちこの義ぎを

重うとのうをう終つひにつひ其道そのみちとと行ゆくゆししここををわわて

嘗かつ命いのち小こ道みちををふふくく終つひにつひ奉たてまつるる

と君きみ汝なんぢぶぶくく身みとと牧まふふとと下くだ僕わらわ乃なり

如ごとくくヤヤららばば終つひにつひ繼ついで嗣ついでしし後のちとと成なり

門外 344 卷 1

○序

ふも成えんや爾しはらち七貫院の
重おもとを念ひ多し家業も少成専
しめて教く私の遊興とすも終かし
こむしあむむ四十歳小至く全して失
もふくしとこれ不息男も流
もくめく重任と取しと退老安後
能方とたわぬ作まは東方武城

あぢい透子日光若御社も参おして
太平國恩の所由を謝し孝親且共
孝一終に因く井畦の見同を廣めく
猶老後終一得ありと成祿が布
但一すに免遊とあるべきや
小ハあらぬが宗しざりし一万又西方
中國五物も極歴しく共崎は至く

悔^くりある是^{こゝろ}ふおれ^{こゝろ} 意^{こゝろ}を^{こゝろ}なわ但^し
老年^{らうねん}の似^に合^あしうぬ遠^{とほ}方^{はう}僻^{へき}也^やち
跋^{はつ}渉^{しやう}身^みとを^をまじ^{まじ}見^{けん}孫^{そん}乃^ゆ憂^う慮^{りょ}も
顧^{くわん}こ^こを^をや^やし^しを^を決^{けつ}し^し生^{せい}涯^{えい}勤^{きん}じ^じべ^べお
事^{こと}ハ^ハ改^かま^まは^はと^とめ^めと^と死^しす^すと^と可^から^らわ^わと
し^しほ^ほど^どふ^ふあ^あり^りよ^よな^なれ^れば^ば徒^とに^に飽^{ほう}食^{じき}あ^あみ
し^しも^も終^{しゆう}つ^つと^とを^を舞^まも^も味^{あぢ}糸^き末^まあ^あき^きし^しい^いも^もく

思^{おも}ひ^ひく^くれ^れじ^じ將^{しやう}後^ごニ^ニ同^{どう}志^し乃^ゆ人^{にん}能^{のう}業^{ぎやう}
内^{うち}ふ^ふも^もな^なし^し母^ぼや^や及^{およ}ぶ^ぶぬ^ぬ予^よ小^{せう}道^{だう}す^すが^がぬ
此^{こゝ}紙^しの^のを^を綴^{ずい}り^りめ^める^るも^も辭^{ことば}と^と文^{ぶん}ら^らび
く^く其^{その}實^{じつ}成^{じやう}存^{ぞん}する^ると^と主^{しゆ}し^しれ^れば^ば理^り儀^ぎ
な^なが^がら^らぬ^ぬ又^{また}雅^{えん}の^の人^{にん}乃^ゆ古^こと^と考^{かう}ふ^ふ一^{いち}助^{じゆ}と
ら^らら^らぬ^ぬも^もや^やあ^あら^らむ^む旅^{りよ}路^ぢの^の艱^{えん}苦^くれ^れは^は行^{ぎやう}き^き
乃^ゆら^らし^し時^{とき}し^しく^くハ^ハ老^{らう}の^の癖^{へき}耳^{みみ}之^の癖^{へき}な^なし

曰此係路中漫筆真類兒戲事實
既不能詳而文辭又不足觀免覆
酒甕為幸已多又何以傳播之為
書肆固請曰不然一開此卷名山
之秀拔巨海之洶蕩瞭乎在心目
使人慨然有萬里之懷且其山川
險易道里遠近可以視地理物產

有無士女好尚可以察風俗豈啻
可當卧游而已哉族人亦從而德
慙焉余不得拒遂如其請乃錄其
由以為後序

文化丙寅九月

吉田重房



下高相... 育無士女...

筑紫紀行卷一

肥前國長崎... 所をわと... 行程山海... 心々漁谷... さらぬ頂... 列を... けく... 先と...

来就といひて行かぬありしに朋友の親族の人々家人共
すでどがらうははらふに遠く来ふ琵琶島に至る時衆を
あやまるとも橋とわらに東のた旭の光を果しきわふ山の
翠色をみるふもいれぐし送うとう人の程も志すいふを強
くおめて之を中小の内田何某其外一西輩の茂なる花んぞ
京まで送うといふもと程も伴いゆく午刻頃ふ起月と渡り
船ゆく内田亦人ふ小志うり別とて渡り大野里不實母の
おのころふふ訪いするお敷く其里近くなれば里人誰や彼や
お迎へ待あせ居く今日此所おたうゆさし奉と取うかた作ハ
疾わおまをゆ迎へ参ると作のこも前後うそらせハ

物がわりははゆ程なく母乃家おふ所おも家人の男女も
門外お出居く蹲りて地はは言かんごとくあらび待むらん
そら其中よ母を所側さびはふる者おは言ととハいや安泰お
おつゆも今や来ませると志おふゆるさび給おれう早く連
きり給へと先おまきへく苦言給がくも母は許おせれば母へ
なうおびおおおはははは物言志給いは度々の旅の事も
閑よりお給いし氣色もあつておやうなる所高齡ふを
おいせれどもそのもいさうも給ふお物つこまいほぐる中
おもお食意の事何や伝付る我等年五十ふあまりぬる旅は
きく童のまも思ひ給するは実子と信お親れはをわらわと奉さ

いじりては日暮ぬまに村内乃親族れ人々集まるとくらぬぐれ
物より酒のこめりていざれがくもるぐや西國は旅ゆむじと
はしいきまるといぬらぶおのり後にも幸來りて思ふ幸ありて
先達も母も申し母も娘もべん幸を許容と給い妻子も人々も
おも娘もふやうに幸定め並く出する幸もあむる新しき
不審ともしりぬが酒と埋りてむじつと先づ只一通の伊勢参宮
或ハ系大坂の芝居がんでふゆけぬと長閑よ春れぬらめよ
かまぬるのこれとよい(ば)皆人懸然して不審乃秋さしては並居
つるかぶらぬ子刺さるよとわなま(ば)皆人帰らぬとあふれぬと
母も宿所らうく卧ぬ

○十七日午後いざ長閑なり朝と起せぬと母もくよわ目も
給いぬ我もあむら乃周意云附わとて火鉢かへたどこの
居給ひながら人お作とほもくまらぬくもてうきまて鬼角
とらぬお辰刺頂おをわねば暇申て別をうて母乃は許と
おふり又人々送ると村に離れと野道ふかしておれも物語
しはあつていませに例のわく歩くとする午刻は小園系乃驛
おとふ内田寺いづれ此所ありて我もが来る候もあつては待候つ
やういづれ海より又人々来候ひけ今頃柏原番場醒が井りんどの
驛くとあつてその方にも居奉乃海もあつて今頃八時ふやと候
○十八日日よ朝と宿屋に高宮愛知川武佐守山乃驛とて

由入割おろ草津乃びふいりわく年来ゆきふをわたる夜屋
なふがーが家は入く宿るか。

○十九日らふ十日よりあまがな宿紙立年刻まで小東ふ着へしや。
人くとちふかるる砂ふのわく道といはがす。皆路村とておて松原お
かろり。朝日華ふふり外と又敷心とわ三井寺のうらまははふ
をぬ遠近乃山と湖水とてあてたわらるる。一望の佳景いんうこ
を紀ふしおきさるる風いんぬさし。辰刻とて矢橋よりと角をと
り家より入く志むり。体びげとと立むくさおれが又たおとといかせ
相りく大津に至ふ。石場とて所入播磨をとうり大なる茶屋
入く体び。此家の遊屋は掛若らふ志むりあまは椀入るまで波

うちとせえ大なる船のりりり地よりや人々珍奇のりおしいとす。
供乃男進もむりやう。今日風まきくいらやんども障子ああ
させては覽せしも休くして小女呼むくあまをさるるにんりすふ
遊水鏡乃沖ぶがめくは良乃う根ようらほきて遠く北越の山く
近く浦これ佳景竹生島竹島の勝状歴こして目中ふあり。おひ
それおおひらるるまじも。風よの海うにまはれは得たがめもあへど
しとまじく障子させし人々とたよ酒の物喰るる。いと佳境と
休る男の笑いしやとむりし。かくく是より歩あまゆきて午の刻
まじくおろり京ふおと著く富小路の尾張屋平およふ人の夢は宿る
は家のまははらうと宿るふおをりたれは。我れめく思ひなふふふ。

瑠璃のつめ地とびんやあめんとえゆるほぶ危くこりねし上
着ハ紫乃縮緬の裾のあつらひ白しと玉川小千鳥乃飛形と小
小画つらめく下ハ紅乃縮緬或ハ紅又紫をんどのいやくれ絞染と
着し又上ハ八丈志ゆとこころもあり帯ハ錦或ハ天鶴絨をた
とどもあつむじとひらかて思ふれ麗粧目と悦ば志あつべしを
あつて女どもハ三線取出して浮はくあつてこころひ出せばあ
人ハ浮立むとすれ後志めやうなる事と好び人もあつて是ハ騷し
て甚俗なり月の朧乃独筆のあつてまはあつたハ似てもはなれ
いふとまてさる風俗がわいさくもあつたつひくがさうさうあつ
とあつめくさるはし記集をさるあつて事あつてこころを

めんものこにまをせくのとあつてむへとらハ人ハあつてはこ
うふややく歳ハ一たづく儻ハのつとあつた人の幸なれんや
の末れおこころいさくもあつてこころいさくもあつてお不
けうたまきあつてはこころいさくもあつて三線おやとてこれあ
うろおよりこころいさくもあつて神おと影と掩てらハ我ハ神と自ら額
おあつて自ら神ハおあつて目げうりおとこころいさくもあつて
あつてもあつての体と志のひららふもあつた人ハあつてさ
うろたんとあつてこころいさくもあつて君達のはこころいさくもあ
つてさふらふ女二人三人らとあつてさあつてあつてあつて
てよとのひつて尻うちあつて又ハ抱きけり耳噛む鼻喰人れや

人々伏見まで見送らんとも神を信もきかずして辰刻もふ
こも旅宿と立出まきせられいふのどろり四條とあふ横おく東
洞院とあふおの志らしくして東の町とてまて野邊よかふ
塩谷のまの園山あきの奉おまひやとてありける奉も其所
彼所うしまればいふまきくむらむらまよひはあて行く手拍てうりし
おまひるんぞすまじおふもあまこまもむらぐあておりあ
そくしるまも祝おむじといひおつゆきわひるるの石り
おく躰つまもあびつて午刻つぎぞお伏見ま志く京橋の側
なるゆき屋より船宿おつる供の男ともとよびくあまに云付らせ
酒をその人おせく送るこなしくやたおのこらす八月頃おハ

必くつとくめであり對面とすよとて約をまば人々口くちおげかぐの
旅路たうのうらね大雨暴風の日もあまん歌いふとあま罷び勞らうし給ひ
或ハ日ひもまてくも旅宿ふまよひもあまもあましおあまてハ
あまいね使しのりもあまんとあまふくふはがかりままざりして早く
おつとあまんとあまお船人ふねあまもあま今舟おひるあまおく石
まき人ひとと志しまらふは使したらけの男おとこが若わかあまもあまふくせうして
程ほどもあまあまもあまいふびくおれまあまもあま婢めかけもあま蒲團ふしん
まきせくあまあまも舟の束たば因ゆすうしてはあまあまもあま塩谷しほあまあま
のりあま舟の中と彼かまもあまあまあまあまあまあまあまあまあま
かんあまいあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

の意をいさぐび僕が方ふつらせらん奉とやんどの岸より船の
棧板橋とよしてまゐるなまき甚危きと舟人は助らまてて糸の
まはりのまき漕出づばんとやしくまゐるあつらひの男も
舟よりまてておちなげお眠ふゆり記せどもまきたせざるは渡り谷
おもしろくておちりたどこゝろののゝわいさひし風は吹ともえ
えのどあつらゐるゆゑあつらゐるまててかゝるふらんといふすらす
ちりどまきとせえとまててまてておちりたどあつらゐる飯餅
牛房いもつらん皆目さめて酒の上へうらぬうと不敬なる祠
のまきとまきよ耳ちりくのゝあつらゐるのまきと舟あつらゐる物書具もたつら
早敷方はまてけるよまてておちりたどこゝろのまきと目とまてて

教をてまてけるゆゑあつらゐるまてておちりたどあつらゐる
ハ物なる男ハ艦網とよするの船はあつらゐるまてておちりたどあつらゐる物
持来とよまてけるゆゑあつらゐるまてておちりたどあつらゐる物
より腮へしたく白毛とよするの髪生とよするまてておちりたどあつらゐる眼
足ひききていもく醜くしつらゐる男なり。塩谷ハ茶碗とよするまて
此男の美形なりと思ふしおちりたどあつらゐるまてておちりたどあつらゐる
さつらゐるまてておちりたどあつらゐるまてておちりたどあつらゐるまてて
谷とよするまてておちりたどあつらゐるまてておちりたどあつらゐるまてて
表よへて時刻むら大坂よへぬる塩谷の日本橋乃下より上
アそ塩谷の河内屋に所太郎が家よへておちりたどあつらゐるまてておちりたどあつらゐる

て。長崎より本業中人の来つしてゆき此船志願ひりきりくちりく
ふいもて。金六十四よちり。男このこあく。人品きんひん実体じつていふ。ゆ名ハ。女。諸と
い。や。女。諸。ま。で。の。諸。次。の。奉。じ。も。又。船。の。奉。じ。も。ま。で。巨。細。子。川。文
わ。ら。い。ゆ。の。ま。じ。げ。り。日。か。ご。う。ま。で。な。ら。や。示。し。合。せ。く。あ。す。り
兼。舟。よ。つ。ふ。お。約。と。さ。あ。く。へ。り。

○廿六日。午。す。い。の。ど。も。し。船。よ。入。く。突。刻。が。り。喫。筋。乃。旅。宿。と。立。て。
る。船。場。より。ゆ。の。ま。の。系。を。ハ。渡。以。園。九。亀。と。の。下。の。船。あ。て。渡。り。わ
け。大。坂。よ。り。も。る。人。と。の。せ。あ。り。て。ま。こ。こ。ら。わ。り。こ。よ。わ。る。人。と。を。ま。せ
ゆ。て。舟。中。あ。り。に。の。こ。と。り。通。り。ゆ。の。ま。ら。あ。く。ち。の。り。て。臨。安。と
た。ま。さ。い。向。い。て。ゆ。だ。こ。の。こ。つ。船。出。と。ま。ち。の。ゆ。る。ふ。ま。ま。未。ハ。さ。い

よりて。昨日仰々よりし奉と。宿乃。主小も。此船。小も。あ。ゆ。り
ま。つ。の。と。書。付。を。と。て。我。前。小。恭。し。く。さ。い。並。と。い。れ。ば。

船宿大坂道船場

大和屋孫三郎

船次濱波丸亀

大工屋清之助

水主同下

貞八

同 同

和三八

右船賃丸亀と。こ。ま。人。の。飯。料。大。浪。式。拾。五。文。也。

丸亀より安藤三浦との船賃同額

官島より豊前小倉まで船賃同額

以上船賃合浪三目目也

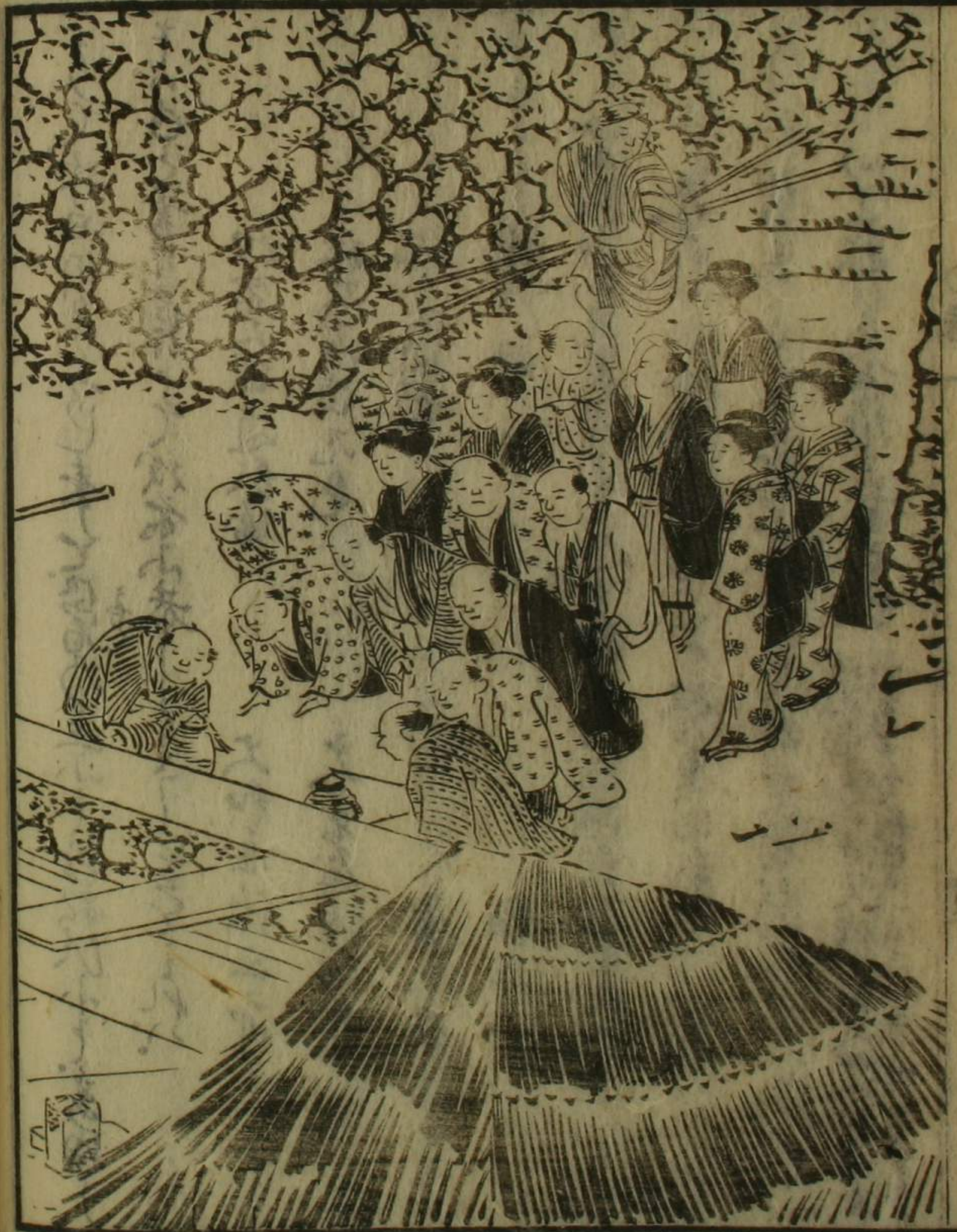
但丸亀よりゆ一人増か船人四人して小倉
小倉よりゆ船賃一日小二米増也

大坂五軒堀
の図



○卷一

十三



や書付りて子割にるんとならぬ船に死して志ざりて
まゝ船をめていづるあはれ船にもまをせられけりて船を
ぶいていづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
風と宿りていづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
うら森の松はむよえいづるいづるいづるいづるいづるいづる
いづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
家は船をもちてあはれいづるいづるいづるいづるいづるいづる
追風風也るをいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
をいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる

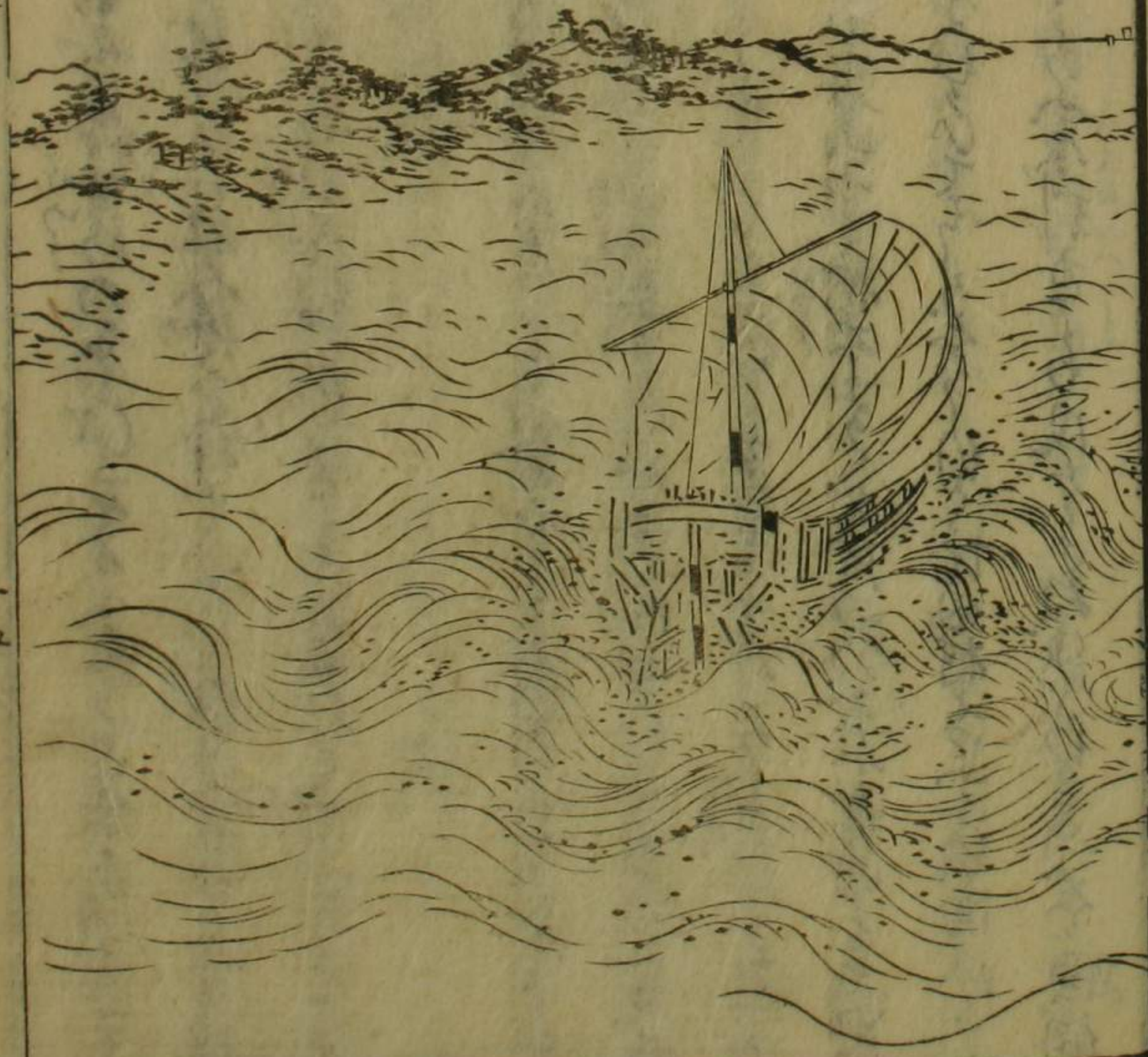
○廿七日日一辰刻に兵庫の沖小なる大坂より此大坂より海

遙小隔きバカとていづるいづるいづるいづるいづるいづる
甲山摩耶山舟生らひていづるいづるいづるいづるいづるいづる
沖を兵庫原へいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
系橋を修しはすいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
午刻より淡路の津にいづるいづるいづるいづるいづるいづる
淡路の津よりいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
め浪際より小船も数本並立し合々画景を賣るいづるいづる
すむる風よりいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
よるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる
ちうぐいすの沖も小船も数本並立し合々画景を賣るいづるいづる

淡路島

○卷一

十五



播磨国
舞子濱

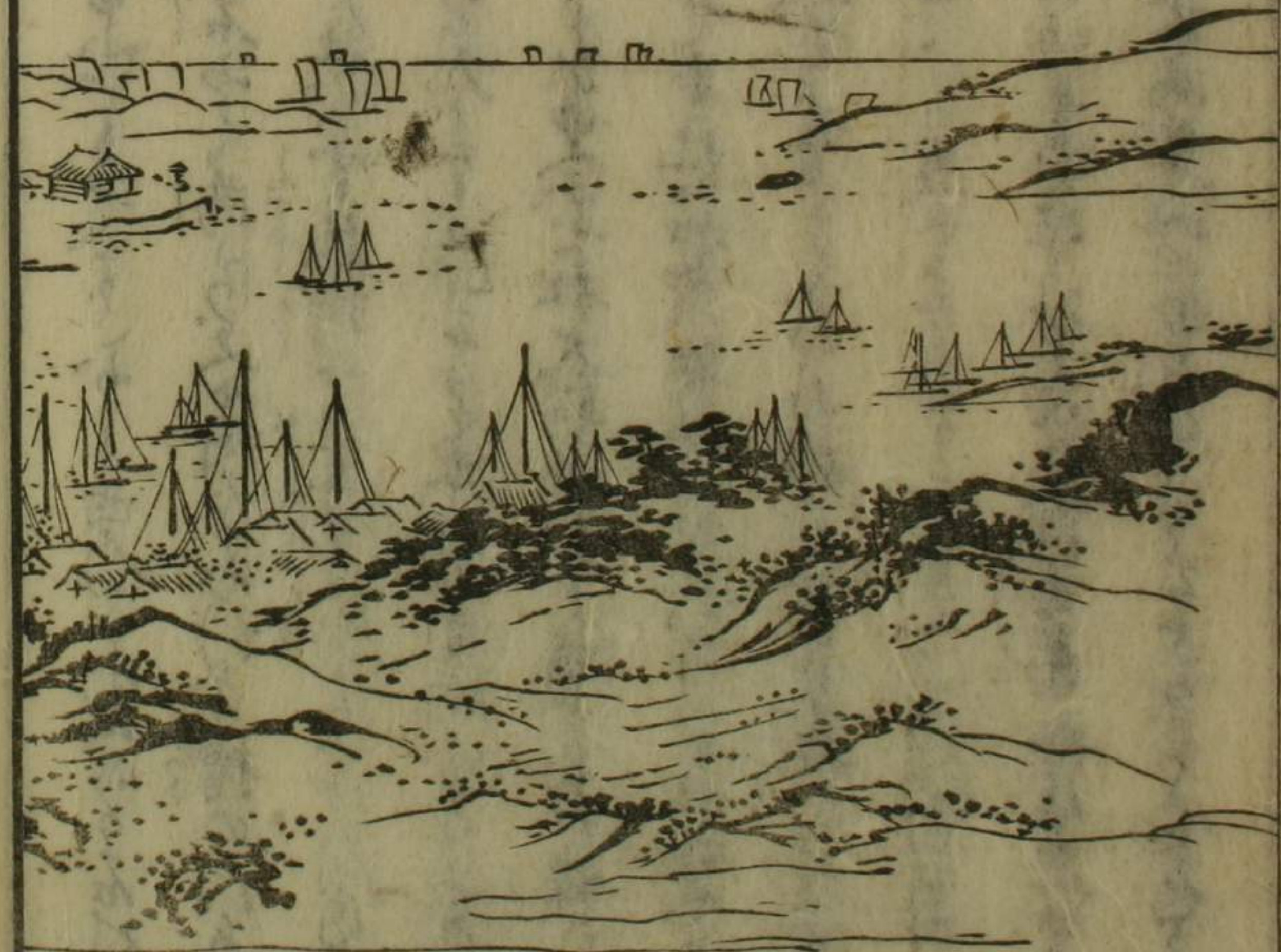


給ふといふはまきこがくろくごころの姫踏より三百石は及人百人位の
虎守人むらうはもきき守らせうすは後の度は二丁四方げわ
しく南八沖ありま今も東西北のいれいしくぶて茶海を後
あり町家もてていづれおあがるとてをきいぬ店いぬるもきき
あり中板葺あり石成鎮ありありありいづれも石垣をく
築あり軒下までぬけぬくひまき脊戸口の氷漆まで石木五六
尺程づあり町中成りいれいづれいぬたご入やい草細工より職人
むらう富つとんとむらうまきき守らせうすは後の度は二丁四方げわ
こころの換りあるがあまきこい町端町中町小の町とこころ
ちりそそい小名ありいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

詣り揚町の中板より南ふとてまきこい西のふふ文の石成の
居ありまきこい影石しく為り又十間をわいぐ檜の門あり
松皮しくを根葺ありいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
津楽殿二重の塔をいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
まきこい六社並いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
十石神六人ありいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
西京小京都加茂の社人ちまきこいいづれいづれいづれいづれいづれ
八五七年の間いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
れ海屋よりいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
廿七日までありいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ



播磨国室



酒肴の價あひひ十二文なり。俱人數處 薩摩乃花代十六文。但錢一貫文 〇日記の書入る事ハ例もあらずをれどもいざししつゝ幸乃るも
 多烟ふありつゝ幸よく將又文章とびりて事實トとす一違へ
 びつゝ余が本意よあつげもむなり。

〇廿九日とともあつて刻ざらふ歌ヤヒとまどもそんれ杯ハ船出らず。

〇晦日曉前ちひてふそと追風ちひてありとて船出す日出るありつゝ風なき
 船よこつゝふのちそし船人ハ港のうらいけくありてや回ハ赤穂の
 城下とふ昨日白ひまそし夜港にふあとのふゆがてゆ前ふ
 大あぶらの新のありふりつゝ。播磨の室より 〇個海大あぶら 出あきせんつゝ
 大あぶらよほあてゆまし海中ハ小豆島とゆ己刻大あぶら ざらふありつゝ

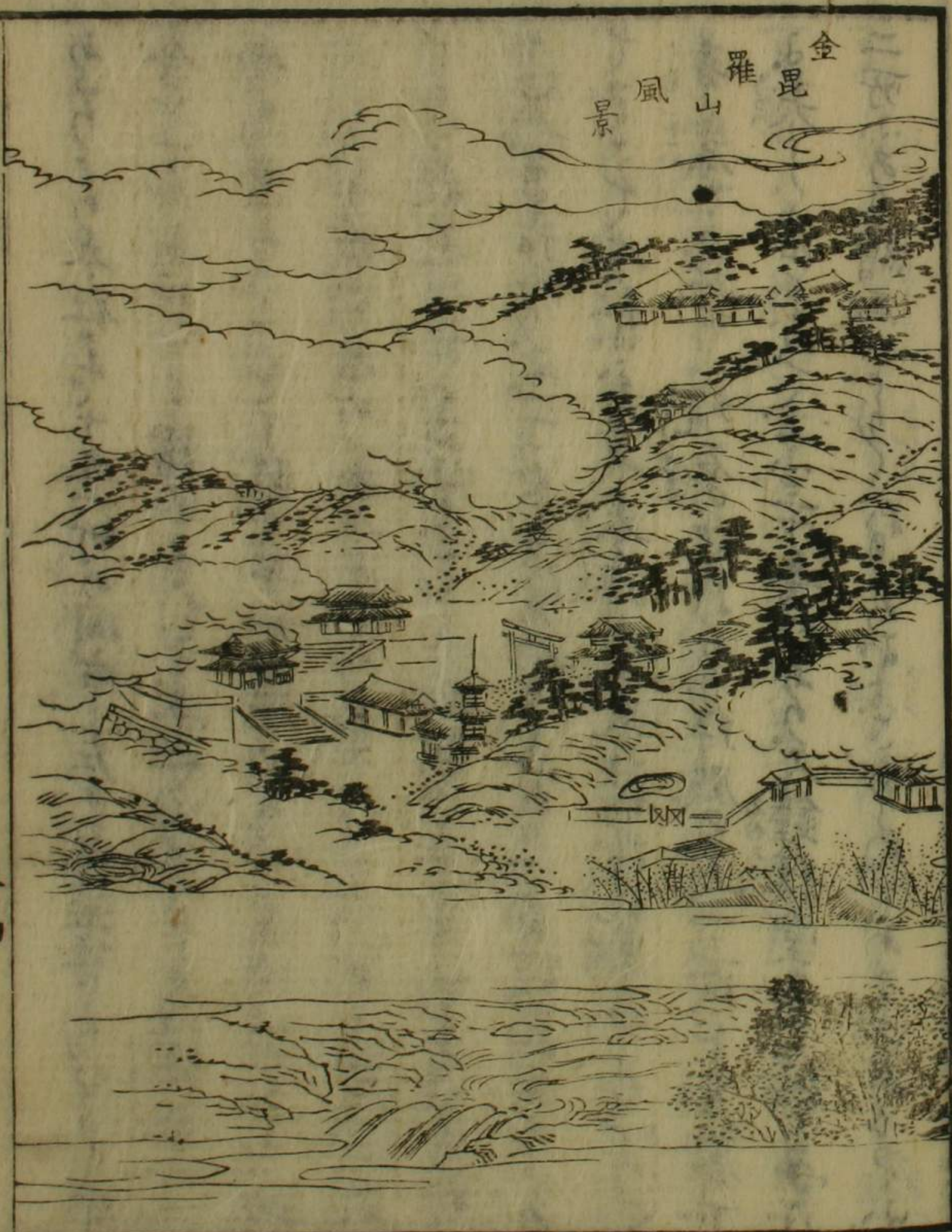
おひつゝはよく吹おくふのうらやとまこと浪いありつゝて方もあるも
 船ははきくもあつてふしはきくも吹風なるあり船ハ留すあつた
 の船どの帆とさるふむきあざるが帆げり又くあつた船も足
 えぬげりようきりちがうえゆるとんもまげ船もさるようんは
 ましあつて極せんとおもつる牛窓前とふあつち成ゆへやぶ
 海あり。びせよりハ八島の夫らうぐ嶽つたけとて南のうらめいあつてさる
 小流すゐく尖とげつてさるのうらめいさるもまよとるやうにあつたあんの
 うらめいけくのせとや回ハさるもハ長門國とてハ島とハ海とさる
 てくはらたあつてさる東國のうらめいさるもまよとるやうにあつたあんの
 うらめいけくのせとや回ハさるもハ長門國とてハ島とハ海とさる

あつち
近き乃らうかむじもなほひきまでもらやうふひりす。やう船人まの志
がふふいふ瀬波の小曲うらどふふ心形こころがたくうらうらぬだにともみだに
似たり。本名ハ飯山いひやまとふとあり。又日比ひびのひび下津井しもつゐとふ
名をも記しりくくもあ。海中ふハ飯山石塔いひやまのいしとうをもいふ。清くもくも
七島しちしまのやうふぶの敷ふもびくくけいけいく佳麗よしいふむらこめめ
もねの城下しろ並ふとの也乃らうりく宇多津うたつのく海うみをんどのふあやう
人家もちりくくぬ申まを刺さぶらう讃岐國九竜さぬきくにくの川がはのうめとくも
干ふあひく二丁にぢやうげり沖おき乃らうあくもめて酒さけはとまるげ湊みなとハ
とふあさあきいけもやう難がたなむらりくもさうりくをりて
川中ふのり入いりく大黒おほくろをほきまふのふあははやく富家とみけのり来き

まら船ふね以もはしと舟ふねが宅たくたり。さくあの大亀おほかめのは城しろハ小こまき山やまのとも
ありて櫓やぐらども白しろくやいあもくもあて景色けしきハ地ちは城しろなり。町
をハ城しろよりああのかさ乃の漢かんカよきちげきていとおきりし法はふの
船ふねども入津いりつとる一都會ひとあひなまむ旅りよ終はつをともむりく又竹たけあそをあそ庭にわ
とけくもてうら家いへあまきこゆ。瀬せ及およ本津ほんつとて京大坂きやうだいさかをんあて
もてくやすまのあくも運はこべてもんまらるるも。はあよりむらむら
まのハ海うみ及およ本津ほんつ終はつなりともふげ地ちも無限むげんの浪なみれりり。浪なみをぬハ
浪なみ百ひゃく二丈にじやうもあつる。浪なみはあつるふいそむおふ二丈にじやうとてふこも
二丈にじやうのふいそむ。室むろより此所こゝまで
廿五里にじふごりうちうし

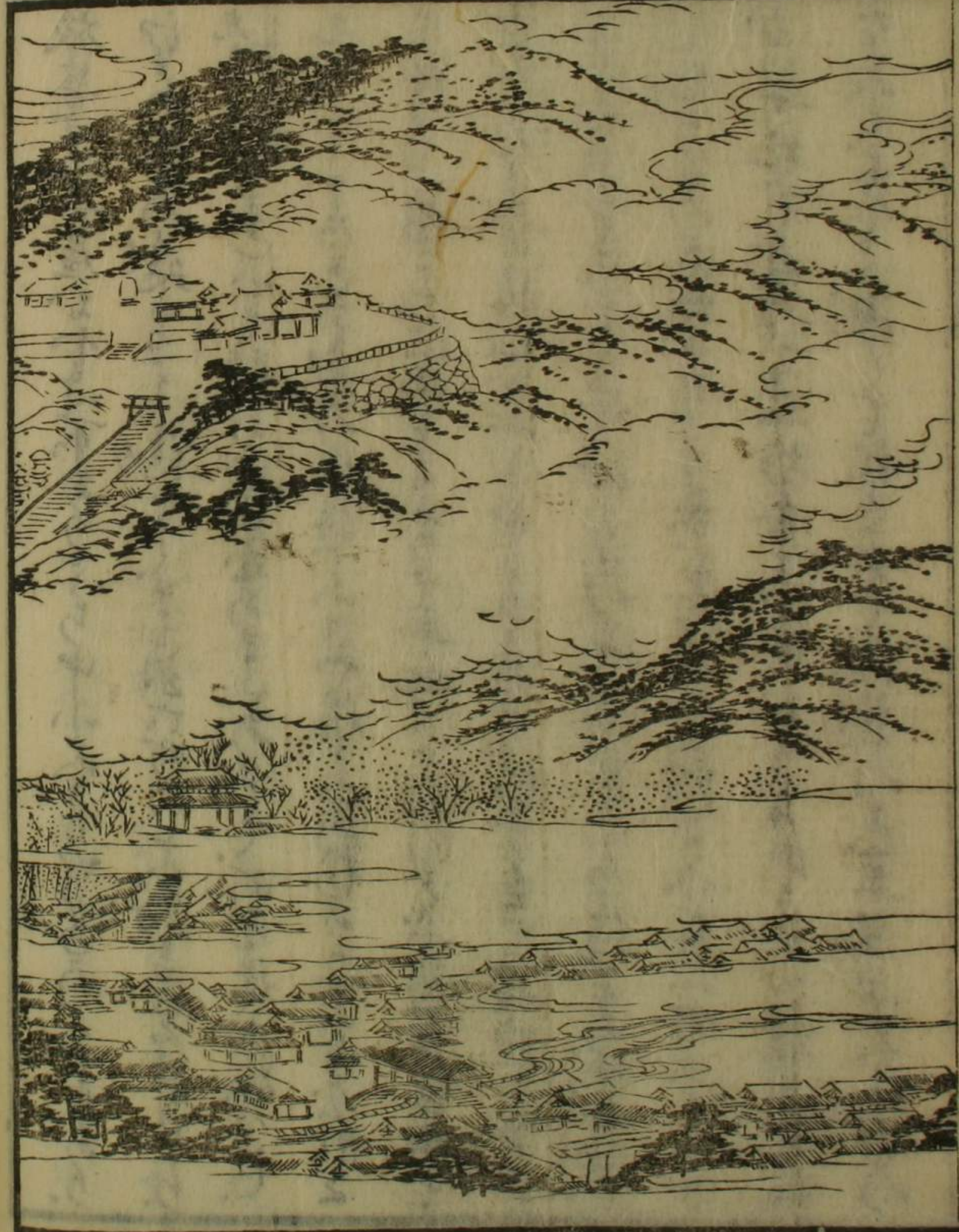
○四月朔日しがつしやくにち日ひより一ひと六國ろくこくまの妻子さいし大坂だいさかの人ひとらうる人書ひとがき状じやう

金
羅
山
風
景



○卷一

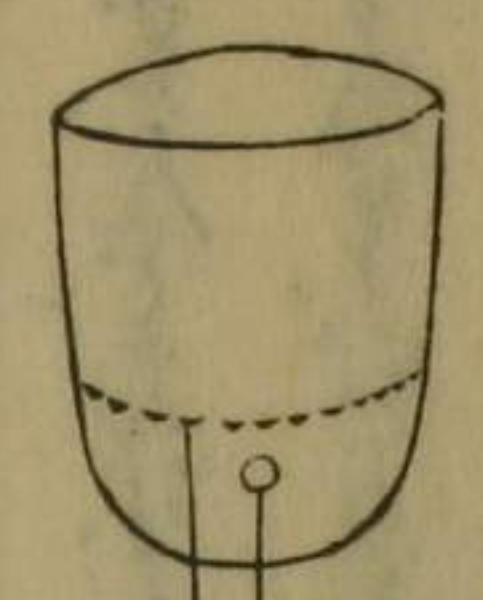
二十四



ありより本社を十五六町の間右と左に石れ玉垣をりかく坊
舎とすま玉垣のうら坂のがしりく本社よりくまき接待所
神馬堂あり。こをすだく半町ほどゆきて茶師堂あり。此
上小長曾我部坂の一番ふをてらまし。やう門あり。此門の柱
どもいれ逆木をてつて。こより石に二丁ばりせまきまき
もろも指あり。又二丁むらに石も居ありて石地盤あり。ま
てつてて本社小むらて参拜す。東北向柱皮葺あり。い
幸願成り。社前小蠟石の地盤あり。拜殿のすく三間むら。廊下
よ美く石とあて上小三千番神あり。又鐘樓堂あり。信る堂は
二所あり。繪馬はとりく。わらわもあまきあるわふ。

去ぬり申年唐人の献きつて額と信馬乃をにけり。堅
三尺五寸むら積五尺むら。紺地ふ金字あり。降神觀と横ふ
書るる大字あり。清乃嘉慶三年小書あり。細字ふ
あるせり。まを社わ東のうら眺望まきまきのわら。わら
飯山。眼下小んおら。浦郷。民家田畠をてんく。わ
うら風系いふもさう。御山と下向く小島屋。降まきまきを
まらむえく。げやくも下山。まふら。わら。わら。降陟の
山道ふく。出けり。まて。我志多し。いれ。め。そ。茶。包。ね。ふ。小。款
待。く。酒。飯。と。出。す。膳。ハ。飯。平。鯛。の。切。身。と。け。豆腐。と。味。つ。ふ
て。煮。り。四。か。ま。ぐ。こ。の。あ。れ。推。葺。ま。び。ま。き。煮。り。ま。わ。

宿せしむる宿を来をむらりてしむるてせききみみかど例の飯
より下りて居るの目言るよりありありわらわらわらせむる宿は居る
る宿よりありありの目言るよりありありの便悪るべきものとれ(思いつ
やすむる宿よりありありの目言るよりありありの便悪るべきものとれ(思いつ
けしむる宿よりありありの目言るよりありありの便悪るべきものとれ(思いつ
厚い一寸口乃徑と二尺五寸深さも二尺五寸ふて底の内徑二尺二寸
びくわもあるべきふ三所四所焼付る土のあるふをせきけす板と
又甕のわと板ふて圍(く)りてしむるてせききみみかど例の飯



此所小水を出す口あり
はせききみみかど例の飯

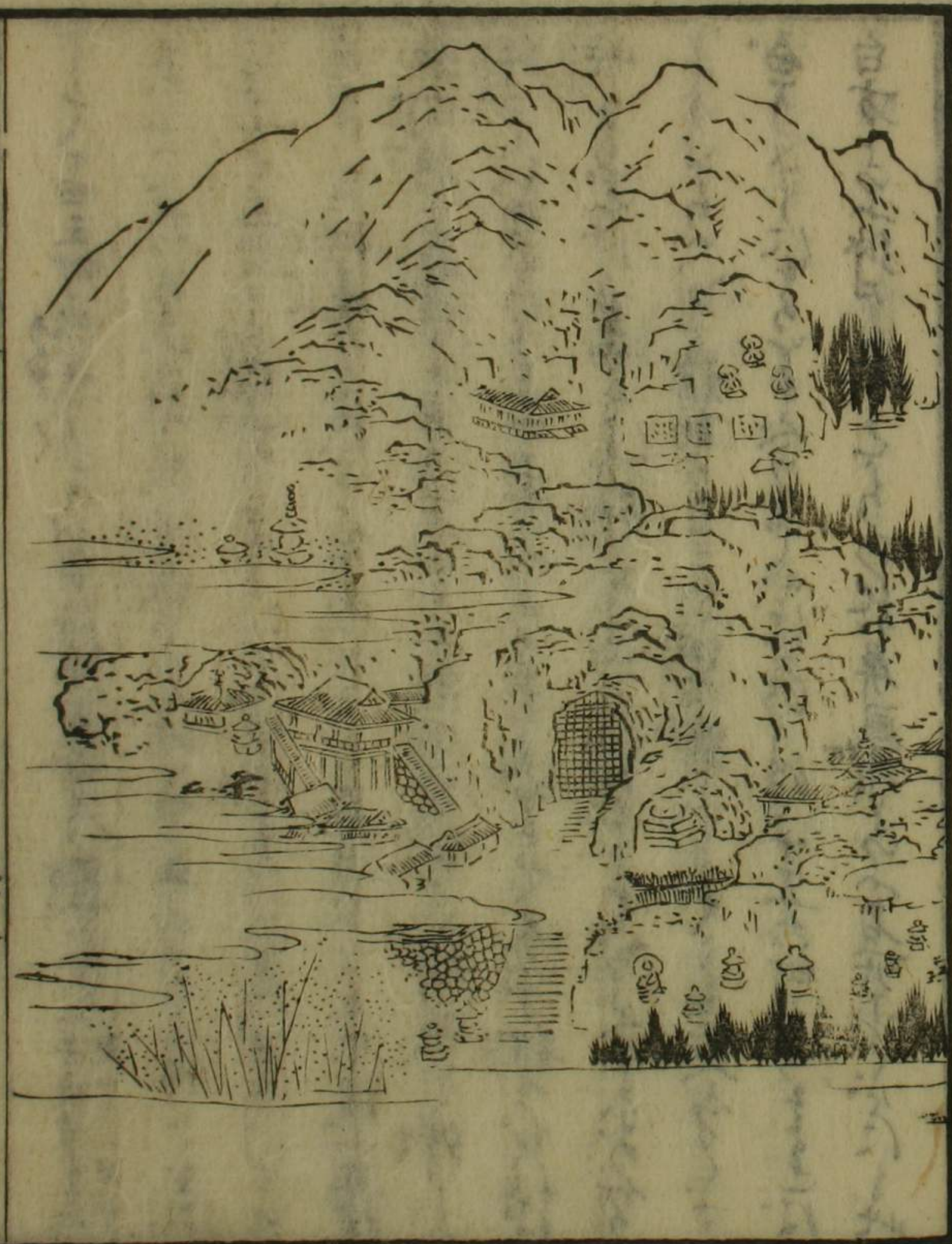
○二日後刻す此小なる宿ありてせききみみかど例の飯
本尊の来師如来少く四國遍路の札所五重の塔をて後
るが四十年むらりて小建立しよりありありの便悪るべきものとれ(思いつ
せききみみかど例の飯ありありの便悪るべきものとれ(思いつ
師と安置せる奥の院ありありの便悪るべきものとれ(思いつ
中く小本堂より奇麗なるありありの便悪るべきものとれ(思いつ
四十丁ほどいきて曼陀羅寺ありありの便悪るべきものとれ(思いつ
所ありありの便悪るべきものとれ(思いつ
辻堂あり本尊の来師の来師ありありの便悪るべきものとれ(思いつ
二十丁ほどいきて城のふりありありの便悪るべきものとれ(思いつ

讚岐國
劔五山
弥谷寺



○卷一

二十八



して十四五町喘息あせぎくの谷にバ弥谷寺の麓ふもとに在る。善通寺より六
系を三町ありて餅飯握飯もちいりと云ふ地もや平らなる所を三バ
て少く志いなり息いき体やめすまま二丁ほどやままバ二王門ありつゝわ
ありて磴道せうだんなる成なりテたゞのかりく本堂小なる中段小奥院
形かたち持もちの岩屋ともあり一人小十二錢づゝおしせく用帳と許ゆるし
拜まがしむ所のありき小十五堂ありあともやりて又二丁程ほどのわんば
峠とがありえげまやともひ汗あせぢりの二ひなとてあつたふのかり
しりよりへとも難所なる人小細雨霏さいうひくともしら及およくす
ぬりさうにほるともべりやふはひり十五六町ありままは
白方より郷むらなりまきよりは屏風浦かのふ名所少くはたも此

也なり。いさふく濱風はまかぜはあまなる松まつどもろ枝えだがうう紀きが度ちかりともなる
間より白浪しらかげのうらうらなるがけありくともゆるなんどすゞ佳景けいなり地あり
弘法大師乃なり誕生たうじんの地ちなりとも即大師乃自作の像と安置し
つる小堂あり心こころ淨じやう不ふ産さん盪だうの堂湯手掛松たうでかけまつをいひあり堂だうれいあ
小十四津せうじゆ橋はしのふ石橋あり橋はし乃なり松まつと彫うる碑い石いけいばあふ立たま
ゆふく三丁なり者ものともあま津つ乃なり地ちにいつる地ちをい丸亀まるかめ乃なり殿だん
の津つもあまらりともがふもふまはまふく人ひとあふまふくしはまはま
丸亀まるかめよりハせむくもの此城下このしろとともやりもふて二丁なりゆめをい
地ちをいふり何なにの礼所らいじよなりけさ善通ぜんたうもあくものまひらきつゝい
地ちをいふり何なにの礼所らいじよなりけさ善通ぜんたうもあくものまひらきつゝい
地ちをいふり何なにの礼所らいじよなりけさ善通ぜんたうもあくものまひらきつゝい

らんさりの多度津小の茶屋 餓鈍屋うだんをんどもありしうども、んごらうを
きこたげふくおろくあつめすべ死茶屋もんび跡谷寺より多
度津まをすま頗長遠なるふおろちうくべき茶屋をた記行の
奉ふくや比もやうらうくかりてうらりして未刺すき小丸亀
の宿ふもどわはきぬ。

筑紫紀行卷一終

